Ⅰ　生活科　研究テーマ

思いや願いをもって対象への働きかけをよりよくしながら、気付きの質を高めていく子どもを育む学び

Ⅱ　研究の重点

対象への働きかけをよりよいものへと更新し、気付きの質を高めるための手立て

Ⅲ　２年次の成果と課題

1　成果

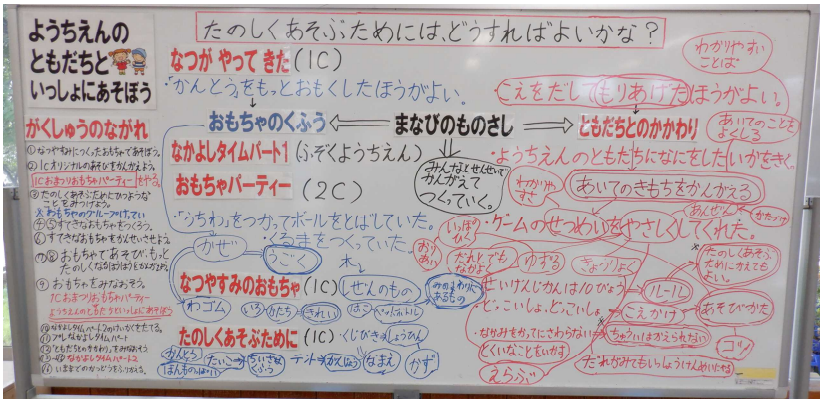
(1)　学び合いの支援や教師の働きかけの工夫

学び合いの支援については、同じ活動をする子ども同士が自然と近くで活動できるように場を工夫したことにより、一緒に活動をしながら、遊びや遊びに使う物をよりよくする手掛かりをつかんだり、協働して遊びを発展させたりする姿が見られた。また、学習活動の節目節目で子ども同士で活動してきたことを認め合う場の設定も意図的に行った。特に、レビューカードを用いた活動については、自分が行ってきたことを友達に価値付けてもらうことで、「学びのものさし」に着目しながら学びの現状を自己評価することができた。そのことが周りと比較して今の自分は何ができていて何ができていないのかを判断し、対象への働きかけをよりよくしようとするきっかけとなった。さらに、気付きを伝え合う中で内容が伝わりにくい意見が出た際は、具体物を用い実演を取れ入れながらの説明を促した。そのことにより子どもたちの意見を比較する基準についての理解が深まり、話合いを通して気付きの質を高めることができた。

教師の働きかけについては「もっと遊びたい。」「こんな活動場所を作ってほしい。」といった子どもの声を生かしながら活動を進めていくことを心掛けた。そのことが主体的な学びを引き出し、子どもたちが思いや願いをもって自分との関わりを捉えながら対象に働きかける姿となって表れた。また、抽象的な子どもの意見に対し「どこがすごかったのか」「どのように相手を思いやっていたのか」などと問い掛け具体的にしていくことにより、気付きを多面的に捉え、新たな「学びのものさし」を獲得することへとつながった。さらに、板書については、「必殺技」や「一歩引く」などのような自分の思いが溢れる言葉を残すように心掛けた。そのことにより、子ども同士が共感し合い「上手くいかないときは一歩引こう。」と、その言葉を生かしながら学び「友達との関わり」を具現化する姿が見られた。

(2)　一人一人の気付きをつなぎ「学びのものさし」を更新するための工夫

１年「ようちえんのともだちといっしょにあそぼう」の話合いでは、一人一人の気付きのつながりが分かるように、ウェビング法を活用した。自分と友達の考えがつながると、「つながった。」という声が多く聞かれ、そこから新たな「学びのものさし」が生まれた。更新してきた経緯を可視化したことにより、視点に沿った話合いや自分の活動を省察する際に役立てることができた。また、振り返りの際は、クラゲチャートを活用した。クラゲを増やそうと意欲的に表現する姿が見られるとともに、分類しながらキーワードをまとめていくことで深い気付きを得ることにつながった。さらに、単元を進めるに当たっては、体験と表現が何度も行ったり来たりするような流れになるように配慮した。試して具体的に見直したことを紹介し合いながら「学びのものさし」を更新したことが、子どもの思いや願いの実現に向けた一助となった。



2　課題　生活科における「学びのものさし」の在り方

１年次研究の課題であり、２年次の重点に関わる「気付きの質を高める『学びのものさし』を生み出す手立て」については、前述の成果により一つの方向性が見えたと考える。しかしながら、「学びのものさし」を子どもたちに明示することは、子どもの学びを促進させる反面、自由度を下げることにもつながり、多様性を失わせる可能性がある。生活科は活動に没頭することが最も大切であるため、生活科における「学びのものさし」については、更に検討する必要がある。また、活動だけでなく表現も楽しんでできるようにすることを通して、多様でより深い気付きを生み出すことが分かったので、この姿を引き出すための具体的な手立てについても考えていきたい。